# 予告された殺人の語り方
## ――ワイルダーとガルシア＝マルケスの小説をめぐって

野谷 文昭

Ⅰ.

『わが町』など三つの戯曲がピュリッツアー賞を受賞したことで知られる米国の作家ソーントン・ワイルダーに、『三月十五日』（1948 年）という小説がある。ユリウス・カエサル暗殺までの八か月を、大部分を書簡、その他報告書、日誌、戯曲、告知などを用いて描いたもので、全知の語り手の不在を特徴としているところなど、のちのマヌエル・プイグの作品に通じるところがあるが、それ以上に興味深いのは、ガルシア＝マルケスがこれを繰り返し読んでいることだ。

ガルシア＝マルケス自身がワイルダーの小説について直接触れているのは、1981 年 9 月 30 日付けのスペインの新聞「エル・パイース」紙に寄稿した『三月十五日』という題のエッセーにおいてで、それによると、この小説を初めて読んだのはその年から遡ること 25 年とあり、彼の言葉を信じれば 1956 年ということになる。そのころ彼はジャーナリストとしてパリに駐在していたが、実際に読んだのはもう少し後のようだ。彼の記憶によれば、丁寧に訳されたものではなかったらしいその翻訳書を、それでもその後何度となく読み返し、そのつど最初と同じ面白さを味わってきたという。さらにこの小説をいくつか他の翻訳でも読んでいる。ガルシア＝マルケスには『生きて、語り伝える』という自伝があるが、残念ながらヨーロッパ時代の始まりまでが語られている第一巻が出ただけであり、結局完結しなかったため、彼とワイルダーの小説との出会いについてはついに語られないままになった。

ガルシア＝マルケスから公式伝記作家として認められたジェラルド・マーティンによる『ガブリエル・ガルシア＝マルケス　ある人生』でも、パリで出会ったスペイン出身の女優、タチア・キンターナとの同棲については、彼女が『大佐に手紙は来ない』の登場人物のモデルであることから、その話題についてかなり紙幅が割かれているのに対し、ワイルダーの本との出会いに関する記述はわずかしかない。一般にスペイン語圏の書き手による伝記や回想録は美辞麗句が多く、記述が不正確だったり曖昧だったりすることが多いが、マーティンは英国人のラテンアメリカ文学研究者だけあってむやみにレトリックを駆使したりしないので、彼が記す事実関係はおおよそ客観的と言える。だがその彼の記述でさえも、このあたりの事実関係となるといささか曖昧になる。

Ⅱ.

1955 年から 1957 年にかけてジャーナリストとしてヨーロッパにいたガルシア＝マルケスは、その折に友人たちと東欧諸国をめぐり、モスクワでスターリンとレーニンの遺体が保存されている霊廟を見学する。このときの印象は、ベネズエラの雑誌に書き送った東欧諸国訪問のルポルタージュを集めた『社会主義諸国探訪―鉄のカーテンの内側で九十日間』から窺うことができる。伝記的事実によれば、属していた母国コロンビアの新聞社が政治的原因で閉鎖され、給料の送金が途絶えたために、彼はその日暮らしの身となる。だがその後、ジャーナリストの職を得てベネズエラの首都カラカスに赴く。そして 1958 年初頭、その地で独裁者マルコス・ペレス＝ヒメネス将軍の政権が崩壊するのを目撃するのだ。その劇的体験について彼は前述の「エル・パイース」紙のエッセーで、「権力の不可解さに対する気掛かりの発端」はそのときのエピソードにあると述べている。

マーティンによると、ガルシア＝マルケスはそれらの出来事に遭遇してから間もなくワイルダーの小説『三月十五日』を読み、この本がモスクワでしばらく前に見た、防腐処理を施されたスターリンの遺体を思い出させたという。スターリンの手の特徴はその後『族長の秋』の独裁者の女性的な手を描写するときに用いられることになる。しかしこのあたりの前後関係については本人の記憶が不確かなこともあり、「しばらく前に見た」という曖昧な表現にならざるをえないのだろう。というのもガルシア＝マルケス自身、カラカスでの体験が先か、初めて『三月十五日』を読んだのが先かは正確にはわからないと言っているからである。だがどうやら少なくともモスクワ訪問のあとらしいことだけは確かだ。

ガルシア＝マルケスにとってワイルダーの件の小説との出会いが重要だったことは、『族長の秋』を執筆中、権力の偉大さと悲惨さを知る源泉としてそれを常に座右に置いていたという事実からも窺える。権力者の栄光と末路を語る『三月十五日』の主人公が貴族であるのに対し、『族長の秋』の主人公がそれを反転させたような卑しい出自の人物に設定されているあたりは、ヨーロッパ的価値の転倒を、ときに皮肉をこめて試みてきた作家にふさわしいと言えるが、一方その設定は決して奇をてらったものではなく、むしろラテンアメリカの現実を踏まえていることにより、作品にリアリティを付与している。また物語の展開の時間の構造を直線ではなくらせん状にしたのも、英雄の暗殺を描いたシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』や、英雄に仕立て上げるための裏切り者暗殺の舞台をとりあえずアイルランドとしたボルヘスのひねりのきいた短篇『裏切り者と英雄のテーマ』を意識してのことかもしれない。

Ⅲ.

ところで、独裁者を扱っているために『族長の秋』との関係に目を奪われがちだが、『三月十五日』はその設定や要素が、のちに書かれた『予告された殺人の記録』に使われている節がある。しかしそのことは筆者の知る限りこれまで指摘されていないようだ。ワイル

ダーの小説の2003年版にはカート・ヴォネガット・Jrが「序言」を寄せていて、そのなかでヴォネガットはワイルダーの1927年に出版された『サン・ルイス・レイの橋』を挙げ、「全員ではなくともある種の人間には、避けられない運命があるという可能性」について触れている。そして、ユリウス・カエサルはその種の人間であり、ワイルダーにとり、その人物像を描き出すのに『三月十五日』で用いた想像上の私的日誌という手法に勝るものはなかったと彼は言う。ちなみに『予告された殺人の記録』に日誌という手法は使われてはいない。だが、殺人の対象となる青年サンティアゴ・ナサールが避けられない運命を背負っているかのように描かれていることに注目したい。彼は「町」の外からやってきた父親の死後、その遺産によって、若くして名士となる。ガルシア＝マルケスは怨恨などサンティアゴが殺される理由をいくつも示唆しているが、卑近で現実的な理由と同時に、物語に神話性を纏わせることで、彼が殺される運命を背負っているかのごとく描いていることを見逃してはならない。その神話的要素に占いや夢、予兆などがあり、彼はその効果を巧みに用いている。また古代ローマの伝記作者スエトニウスの『ローマ皇帝伝』で語られる、殺人の計画を予告する手紙を殺される当人が読まなかったという偶然を、シェイクスピア、ボルヘス、ワイルダー、ガルシア＝マルケスのいずれもが採用しているのも古典が受け継がれていくという意味で面白い。

とりわけスエトニウスの『ローマ皇帝伝』のカエサル暗殺の件には『予告された殺人の記録』の冒頭の一節に酷似した一節があることを指摘しておきたい。筆者はかつてその冒頭をカフカの『変身』やカミュの『異邦人』のそれと比較したことがあるが、あらためて読むと、ガルシア＝マルケスが『ローマ皇帝伝』の一節を参照していることは明らかである。その部分を引用してみよう。まずは『予告された殺人の記録』である。

> 自分が殺される日、サンティアゴ・ナサールは、司教が船で着くのを待つために、朝、五時半に起きた。彼は、やわらかな雨が降るイゲロン樹の森を通り抜ける夢を見た。

続いて母親が、「その前の週は、銀紙の飛行機にただひとり乗って、アーモンドの樹の間をすいすい飛ぶ夢を見たんですよ」と言っている。

一方、『ローマ皇帝伝』では次のように語られているが、スエトニウスは出所を「カエサルと親交の厚かったコルネリウス・バルブスの書である」としている。

> 殺される日の明ける前夜、カエサルは睡眠中に、自分が雲の上を飛んでいるかと思うとユピテル大神と握手している夢をみた。

注目に値するのが、『予告された殺人の記録』の「自分が殺される日」という衝撃的な書きだしがスエトニウスに負っているらしいことである。そうだとすると、ガルシア＝マルケスはワイルダーからスエトニウスと遡って読むことでこの書き出しを思いついた可

能性がある。

ワイルダーの小説は鳥占いの報告から始まる。鳥占(アウグル)神官団長がカエサルに送った書簡には、生け贄を屠った結果が記され、吉凶混じったその報告は主人公を取り巻く不穏な空気を象徴している。『予告された殺人の記録』でも、やがて犠牲となるサンティアゴが見た前述の夢を母親が占うというエピソードから始まっていて、彼女はその判断を誤ってしまう。悲劇の発端である。これを含め、ガルシア＝マルケスの小説は、迷信や噂など現代の世界に前近代あるいは中世的とも呼ぶべき要素をいくつも交え、古い世界を読者の前に提示しているが、そのなかで、自分の処女を奪った相手が誰かと問い詰められてサンティアゴであると答えたアンヘラ・ビカリオは、あたかも巫女が神託を告げるかのようにきっぱり言い切るのだ。ガルシア=マルケスがギリシア悲劇を好むことはよく知られているが、その目的は彼が物語の舞台を創造するときに、卑俗な現実の物語を神話化し、普遍性を持たせるためである。それはやはり名誉のための決闘という通俗的事件に元型的人物を登場させ、実話を昇華させる、ガルシア＝ロルカの戯曲『血の婚礼』などにも見られる手法と言えるだろう。

Ⅳ.

ワイルダーの小説とガルシア＝マルケスの小説に共通点が見られることはすでに述べたが、ここで両者の関係についてさらに触れておきたい。たとえばシェイクスピアの戯曲だと、シーザーは物語の半ばであっけなく殺されてしまう。しかし、『予告された殺人の記録』では、サンティアゴが殺される場面はクライマックスとして最後に置かれ、丹念に語られている。この構成をガルシア＝マルケスは執筆当初から決めていたという。冒頭で彼が殺されるという予告があり、それが最後に実行されるわけであるが、この構成自体は費やされる紙幅の違いはあるものの、『三月十五日』に似ている。ワイルダーは件の場面を次のように描いている。

> カエサルが「おい、これは暴力だぞ！」と叫ぶと、横に立っていたカスカ兄弟の一方が、喉の少し下に短剣を突き刺す。カエサルはカスカの腕をつかむと、そこに鉄筆を突き立てた。それから立ち上がろうと試みたものの、そこにもう一撃が加えられた。鞘から抜かれた短剣で、自分が四方八方取り囲まれていると悟ったカエサルは、頭を市民服で覆い、同時に左手を使って服の襞を足先まで延ばした。こうすることで、倒れた時にも下半身を隠して体面を保とうとしたのだ。
>
> こうして、彼は二三回突き刺された。最初の一撃にうめいただけで、あとは一言も発しなかった。ただし何人かの著述家の伝えによれば、マルクス・ブルートゥスが襲いかかってきた時、カエサルはギリシア語で「お前もか、息子よ！」と言ったのだという。
>
> 陰謀者たちが全員逃げてしまったあとも、絶命したカエサルは、しばらく倒れたまま放って置かれていた。するとようやく公共奴隷が三人やって来て、遺体を輿にのせて家へと運

んだ。道中、片方の腕はぶらりと垂れたままだった。

医者のアンティスティウスによれば、あれほど多くの傷のうち、胸への第二撃のみが致命傷だったと判明したという。

ワイルダーの小説はここで終わる。ただし、この場面の後半ではスエトニウスによる『ローマ皇帝伝』の一部を引用している。

他方、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』はこの部分を登場人物に次のように語らせているが、以下に見る暗殺される直前のシーザーの饒舌に比べるとなんともあっけない。

シーザー　おれがおまえたちであれば心を動かされるだろう、
おれが哀願によって人の心を動かせる男なら
人の哀願によって心を動かされもするだろう。
だがおれは北極星のように不動だ、
天空にあって唯一動かざるあの星のようにな。
空には無数の星屑が散りばめられておる、
それはすべて火であり、それぞれ光を放っておる、
だが不動の位置を保持する星は一つしかない。
人間世界も同じだ、この世には無数の人間がおる、
すべて血肉をそなえ、理性を与えられておる。
だがおれの知るかぎり、その数知れぬ人間のなかで、
厳然として侵すべからざる地位を保持するものは
一人しかいない、それがこのシーザーだ。
そのことを多少なりとも思い知らせよう、いいか、
おれはシンバー追放の主張を断じて譲らなかった、
いまもなおその主張を断じて譲る気はないぞ。
シナ　シーザー―
シーザー　さがれ、オリンパスの山を動かす気か？
ディーシャス　偉大なるシーザー―
シーザー　ブルータスがひざまずいても
むだであったろうが？
キャスカ　返事はこのおれの手だ！
（まずキャスカが、続いて陰謀者たちが、最後にマーカス・ブルータスがシーザーを刺す）
シーザー　おまえもか、ブルータス！死ぬほかないぞ、シーザー！
（死ぬ）

小説と戯曲の違いはあるものの、二つの作品の違いは大きい。さらに、『予告された殺人の記録』の場合、ワイルダーの小説と比べても殺人の場面の描写は圧倒的に長い。そこでは色、匂いなど肉体の有機性と物質感が表現され、犯人の双子の兄弟のひとりが吐く「人をひとり殺すのがどんなに難しいか、お前さんにゃ想像もつくまいね」という言葉を裏付けていると言えよう。

ここで指摘しておきたいのは、ガルシア＝マルケスが、ワイルダーの先行作品を解体しつつ参照しているように見えることだ。先に引用した殺人の場面で、ワイルダーはスエトニウスの伝記に倣い、カエサルが「二三回突き刺された。最初の一撃にうめいただけで、あとは一言も発しなかった」としたあと、「ただし何人かの著述家の伝えによれば、マルクス・ブルートゥスが襲いかかってきた時、カエサルはギリシア語で『お前もか、息子よ！』と言ったのだという」と書いている。シェイクスピアの戯曲では視点はひとつで、シーザーは「おまえもか、ブルータス！」という有名な科白を吐いているが、ワイルダーは、本人が「望遠鏡的視点」と呼ぶ視点を用いてこの場面を語っている。映画のシナリオも手掛けているガルシア＝マルケスはクローズアップなど映画的手法を使い、突き刺した数へのこだわりや致命傷についての解剖学的な説明などを加えて小説を拡大しているが、その根底にはスエトニウスの記述とそれを踏まえたワイルダーの記述があるようだ。

あるいはこんな場面がある。カエサルの遺体が輿にのせられて運ばれるところで、ワイルダーはスエトニウスの伝記と同じく、「道中、片方の腕はぶらりと垂れたままだった」と書いているが、このイメージをガルシア＝マルケスは、結婚に失敗し、急性アルコール中毒に罹った新郎バヤルド・サン＝ロマンが担架で運ばれていくときのグロテスクかつユーモラスな様子の描写に応用しているように見えるのだ。

ガルシア＝マルケスは『族長の秋』を執筆するにあたり、ラテンアメリカの様々な独裁者に関する本、そして独裁者の古典であるカエサルを扱った本を参考にしたという。その経験が、南米の解放者シモン・ボリーバルの晩年を描く『迷宮の将軍』にも生かされていることは言うまでもない。カエサルとボリーバルが似ていることについて実はワイルダーも着目していて、あるインタビューで、カエサルとボリーバルの間には共通点があると語っている。すなわち彼によれば、「ボリーバルの精神の働きはカエサルと似ている」のである。この言葉を何らかの形で知ったとすれば、それはガルシア＝マルケスにとり大いに参考になっただろう。いずれにせよ、彼がワイルダーの『三月十五日』から学んだことを『族長の秋』ばかりでなく『予告された殺人の記録』にも生かしていることは間違いなさそうだ。ワイルダーの小説を繰り返し読んできたと彼が語っている記事が新聞に載った 1981 年に『予告された殺人の記録』が刊行されたことは、おそらく偶然であろうが、実に象徴的である。

参考文献：

Martin, Gerald, *Gabriel García Márquez :A Life*, Alfred A. Knopf, New York, 2009.

Martin, Gerald, *Gabriel García Márquez :Una vida*, Mondadori, Barcelona, 2009.

García Márquez, Gabriel, *De viaje por los países socialistas: 90 días en la 'Cortina de Hierro'* , La Oveja Negra, Bogotá,1980. ガブリエル・ガルシア＝マルケス『ガルシア＝マルケス「東欧」を行く』（木村榮一訳）、新潮社 2018 年。

Gabriel García Márquez, *"Los idus de marzo"*, El país, 30 de septiembre de 1981.

McGUIRK, Bernard & CARDWELL,Richard (Ed.), *Gabriel García Márquez New Readings*, Cambridge University Press, New York, 2009.

ガブリエル・ガルシア＝マルケス『予告された殺人の記録』（野谷文昭訳）、新潮社、1983 年。

ガブリエル・ガルシア＝マルケス『族長の秋』（鼓直訳）、新潮社、2007 年。

ガブリエル・ガルシア＝マルケス『予告された殺人の記録 / 十二の遍歴の物語』（野谷文昭 / 旦敬介訳）、新潮社 2008 年。

ガブリエル・ガルシア＝マルケス『生きて、語り伝える』（旦敬介訳）、新潮社 2009 年。

スエトニウス『ローマ皇帝伝（上）』（国原吉之助訳、岩波文庫）岩波書店、1986 年。

ソーントン・ワイルダー『三月十五日 カエサルの最期』（志内一興訳）、みすず書房、2018 年。

ウィリアム・シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』（小田島雄志訳）、白水社、1992 年。

野谷文昭「東京大学最終講義　深読み、裏読み、併せ読み——ラテンアメリカ文学はもっと面白い」『すばる』2013 年 5 月号、集英社。

藤原章生『ガルシア＝マルケスに葬られた女』、集英社、2007 年。